


# ルーブリック評価を活用し SDGs の達成に貢献する ESD 環境教育

奈良市立平城小学校 新宮 済

児童数	560名	教員数	35名
<p>平城地域は、奈良時代の都平城京の北部に位置し、古代の寺院や古墳等も数多く点在する歴史あふれる街である。観光客も多く田畑のなかに残された歴史街道を歩いている。地域の方々は学校教育に積極的に参画してくれる。特に地域産業を学ぶ米作りの学習は地域の農家と一緒に 50年間続けられている。収穫米を地域の神社に奉納したり、地域の耕作放棄地問題について考え、解決を目指す行動化につながる実践となっている。</p>			

## 実際に使ったルーブリック

持続可能なライフスタイルの実践				
	S	A	B	C
新宮済  実践する評価③	子どもだけが変革するのではなく、大人を巻き込むために大人へライフスタイルの変革を要請する	プラごみを拾うだけでなく、出さない生活(ライフスタイルの変革)を実践する	川にプラごみが多いのでごみを拾ってみる	川にプラごみが多いことに気づき拾おうと思う

## ルーブリックについて

ESDについて佐藤(2010)は、知識・技能を獲得することを目的とするのではなく、持続可能な社会構築に向けた「現実的な社会転換」の達成を要求している。この現実的な社会転換を達成するにあたって『価値観』の醸成、現実的な社会転換を導く協働的な『行動』の推進、我々のライフスタイルの改善にむけた『態度』の変容を重要視する教育であると述べている。教師はこ

の3つの視点をもって校区の地域課題に目を向けて ESDの開発をおこない、地域課題を解決する子どもの行動の変容を促し、さらに児童と一緒に学校から地域社会に向けて働きかけていくことが大切であるとする。

#### 資料1 新宮濟・中澤静男(2020)「ESDとして行動化を促す授業開発」

奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要6号



しかし、実際に授業をおこなう際には、授業で生まれた行動変容が本当に持続可能な社会の構築に向けた現実的な社会転換の達成につながっているのかを教師自身も問い直す必要がある。さらに子どもと一緒に問い直し、学習展開を修正(新たな問いの設定)していくことが大切である。この問い直しの具体的な方法として、子どもの行動化を「持続可能なライフスタイルの実践」の視点でルーブリック評価をし、授業展開を修正することで、よりよい行動化につなげることができる。

「持続可能なライフスタイルの実践」はとても広範囲にわたるものである。小学生段階では、持続可能なライフスタイルについて数多く実践するよりも、地域に着目し、地域課題を解決しようとするために、これまでのライフスタイルの変革を促していくことが大切である。その一つの手段として、持続可能なライフスタイルのルーブリックをつくり、指導と評価を一体化させ子どもの行動の変容を促していく。

そこで当評価は、平城小学校 4年生が学習している「秋篠川のプラスチック汚染」を地域課題とし、解決しようとする持続可能なライフスタイルの実践のルーブリック評価をつくり活用した。

## 評価手法を適用した実践紹介

本実践は、地域の課題である秋篠川のプラスチック汚染を解決しようとする子どもの行動の変容を促すものである。校区を流れる秋篠川は地域住民の生活と深く結びついているが近年ビニールごみやペットボトルが多く落ちていて地域課題となっていることから、第4学年の総合的な学習の時間で実践した。問題の解決のためのライフスタイルの変革を明らかにしたうえで、今年度は研究成果を反映したルーブリックを作り実践を行った。

まず、この地域課題である河川におけるプラスチック汚染を解決するために目指すべき児童の姿(行動の変容)を最新の研究成果をもとに設定した。研究によれば、この問題の解決には「プラスチックの使用量を減らし、使用した場合もリユースやリサイクルをおこなう」という個人のライフスタイルの変革が必要であることを確認した。さらに、この河川におけるプラスチック汚染を解決するためには子どものライフスタイルの変革を地域の大人も巻き込んで実現しなければならないことも明らかになった。なぜなら河川におけるプラスチック汚染の発生源は大人にあり、大人も行動の変容が必要であると考えたからである。以上のように、実践で目指す行動の変容(「持続可能なライフスタイルの実践」をする子どもの姿)を設定した上で、河川におけるプラスチック汚染を解決するための行動の変容を促す授業を開発した。

#### 資料2 新宮濟・中澤静男(2021)「河川におけるプラスチック汚染を解決しようとする子どもの行動の

変容を促す要因についての考察」奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要7号



授業実践では、子どもから生まれた行動化をルーブリックから評価していく。このルーブリックには2つの視点が組み込まれている。1つ目は、先に設定した「プラスチックの使用量を減らし、使用した場合もリユースやリサイクルをおこなう」という問題の解決につながる個人の行動の変容の視点である。2つ目は、先に述べた大人への巻き込みを目指す視点である。ロジャー・ハートの「参画のはしご」を参照しルーブリックに加えた。8段階目には「子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する」というレベルが示されている。児童から大人へ河川におけるプラスチック汚染を解決するためのライフスタイルの変革を働きかけるといふ8段階へ参画することが秋篠川のプラスチック汚染の解決には必須であると考えた。そこでルーブリックのS評価の視点にこの要素を入れた。実践のなかで子どもから生まれた行動化が社会参画へとつながっているのかについても随時評価し、8段階につながるように展開を修正していった。

#### 資料3 新宮濟(2021)「河川の地域課題を題材とした実践」

ACCU 変容を捉え、変容につながる評価のカタチ



この評価は学習展開ごとに活用したが、毎時間重ねていく「ふりかえり」のポートフォリオの記述や授業観察からも子どもの変容を確認していった。

## 児童の変容

R3年度の秋篠川の実践はコロナ禍により多少学習展開を変更したが、これまでと同じような、プラスチック汚染を解決するための子どもの行動の変容に近づいている。現在(1月中旬)において子どもたちは、秋篠川のプラスチックごみを自分事として捉え、「プラスチックの使用量を減らし、使用した場合もリユースやリサイクルをおこなう」という問題の解決につながる個人の行動の変容を、冬休みに25人の児童が家庭で実践し冬休み新聞に記載した。このような行動の姿が生まれた時にルーブリック評価を行った。結果を見てみると、30人中23人がAの段階と捉えていることが確認できた(1月中旬の段階)。

## 実践を通しての考察、発見、感想

ルーブリック評価を活用することでの効果として2つある。

1つ目は、教師における授業づくりへの効果である。これまで、子どもの思考過程を見取る方法として、子ども一人ひとりへの聞き取りや、ポートフォリオを活用し次の学習展開へと活かしていた。今回ルーブリック評価を活用することで、子どもの思考の過程の段階を数値として把握した。これにより、次の学習展開へのタイミングを的確に決定することができた。

2つ目は、子どもの行動化への意欲や価値づけである。コロナ禍により、実践のなかで行動化した子どもに対して地域の大人に評価してもらう機会を今年度は数回しか持てなかった。これにより、行動化を起こした自分への成長を感じたり、自分の行動化がどのように問題解決につながるか問い直す視点を持つ児童が例年より少ないと感じた。

しかし、ルーブリック評価を導入することで自分の行動が問題解決につながる、どの段階であるのかを自問自答できるよう場となった。さらに、ルーブリックを活用して自分自身の行動を評価できるようになった子どもは、大人に対しても同じような視点で評価し、大人を巻き込んでライフスタイルの変革を要請し、地域課題の解決を目指すことができた。

## 評価手法開発にあたり参考にした文献・書籍・教材

- ・ 中澤静男(2004)『構成主義にもとづく学習理論への転換—小学校社会科における授業改革—』「教育実践総合センター研究紀要」奈良教育大学
- ・ 佐藤真久(2010)『ESDにおける「知の構築」のあり方—「持続可能性」・「開発」・「教育」を橋渡する開発コミュニケーションに焦点を置いて』「ESDをつくる—地域で開く未来への教育—」ミネルヴァ書房
- ・ ロジャー・ハート(2000)『子どもの参画』萌文社

### 問い合わせ先

学校名	奈良市立平城小学校
氏名	新宮 済
電話番号	0742-45-4151
住所	奈良県奈良市秋篠町1394
メールアドレス	jyaianism14@gmail.com